沼津市明治史料館通信

二〇二三年四月

通巻153号

■江原素六とその周辺　67

　芹沢光治良『人間の運命』のなかの江原素六

■令和４年度新収資料の紹介

■令和４年度当館収蔵資料の利用

■おしらせ

◀ 島田三郎肖像（絵葉書）
当館蔵

島田三郎揮毫「秀為不二嶽発為万朶桜」扇面
当館蔵

　政治家・ジャーナリストとして活躍した島田三郎の号「沼南」は、沼津兵学校資業生だった明治初年、沼津の南に位置する駿東郡我入道村（現沼津市）に仮寓したことに由来する。同じ資業生の石橋絢彦・塚原靖らとともに下宿し、それは後藤徳太郎（後に楊原村の村会議員・助役）の家の隣家だったとされる（大野虎雄『沼津兵学校附属小学校』）。その後、島田・石橋らは沼津城本丸跡の寄宿舎に入寮した。

芹沢光治良『人間の運命』のなかの江原素六

『人間の運命』（一九六二～六八年刊）は、沼津市我入道で生まれ育った作家芹沢光治良（一八九六～一九九三）の、明治・大正・昭和にわたる自伝的な長編小説である。芹沢は江原素六と面識はなかったと思われるが、『人間の運命』には何か所かに江原や沼津兵学校のことが出てくる。以下の如くである（新潮文庫版に依拠）。

● 強い向学心を持ちつつも貧困で苦悩する主人公森次郎を、優しく助ける我入道の先輩・八矢は、小さい頃、「今の中学校よりすすんだ」「沼津の兵学校」に部落でただ一人入学したものの、学校が閉鎖されたため勉学を止めてしまった、続ける意思があれば「江原素六先生がなんとでもしてくれた」のになどと次郎に告白し、勉学の大切さを説き、その継続を勧める（第一巻「父と子」）。八矢は、『人間の運命』よりも後に執筆された、主人公の幼年時代を描いた、序章ともいうべき「海に鳴る碑」（『芹沢光治良作品集』第七巻に収録、一九七四年発表）では、森家の居候部屋に住んだ「山本青年」として登場し、三歳の時から森家に来て、「浜のお寺」で旧幕臣の教師に学んだ人物であるとされている。

● 森次郎は田部直道（次郎の養父となる実業家）との会話の中で、かつて自分を養子にしたいと望んだ八矢は、「江原素六先生の弟子」だったと述べる（第三巻「愛」）。

● 米騒動から二年後とされるので、大正九年（一九二〇）のことであろう、東京帝国大学の二年生になった森次郎は、養父田部直道の母の意向により、問題児で学校の成績が悪い直道の養子平助（次郎にとっては義弟）を及第させてもらうべく、平助が通う中学校の教頭を訪ね、心ならずも金銭（賄賂）を差し出す。その「清水教頭」は、同校の創立者が江原素六であり、清貧な江原の教育方針を守っている我が校では、金で不正を通すようなことは絶対にしない、君がたとえ無理やり頼まれたのだとしてもそのような行為は断然拒否するべきだと、次郎をたしなめる（第四巻「出発」）。

● 次郎の実父森常造は、全財産を投げ出して天理教に入信し、家族を貧窮に追いやる原因をつくった人であるが、子どもたちの進学をめぐり次郎らと会話する中で、自分も若い頃には「沼津兵学校で学問したいと両親に頼んだこともある」と述べる（第四巻「出発」）。「海に鳴る碑」では、常造は、沼津の集成舎やその中学部に通い江原素六の教えを受けていた従兄たち（「浜の家」の忠一郎・義次郎兄弟）を羨ましく思い、父に集成舎への入学を頼むが拒否され、代わりに沼津の妙海寺で「沼津兵学校の先生だった士族の学者」に漢学を学ぶことになったとされている。忠一郎と義次郎は、「江原先生のことを日本の新しい文明の灯のように」賞賛していた。やがて森忠一郎は、江原の感化でキリスト教に入信し、村に宣教師「ビーチャム」（なぜかミーチャムではない）を招くなどしたため、村八分となり、勘当されアメリカへ渡ることとなる。一方常造は、忠一郎からキリスト教について教えられ、後の天理教入信へとつながる信仰への道の第一歩を踏み出すこととなった。

● 石田孝一（森次郎とともに沼津中学校から第一高等学校・東京帝国大学に進み外交官となった親友）とその父孝造との会話において、孝造は自分が、「沼津兵学校のあとを引きついで、江原素六先生とイギリス人のミーチャム先生の合作のような」、「今の沼津中学校とは関係がない」「沼津中学校」で西洋式の教育を受けたが、途中廃校になったので静岡中学校に転校したこと、「あの頃の沼津の教育は、東京以上に隆盛であった」こと、三井財閥を背負っている米山梅吉のように、故郷を出た同校出身者には活躍している人材が多いなどを述べた。また、石田孝造は森次郎に対しても、中学生時代、江原素六が「福沢諭吉先生と同じようなこと」「経済や社会の話」をしてくれたという思い出を語り、自分のような先見の明がなかった地主階級は現在落ち目になっていると嘆いた（第六巻「結婚」）。

● 田部直道は、養子平助が麻布中学の生徒だったことから、同校の創立者が江原素六であることは知っていたが、それ以前には、閉鎖された沼津兵学校のあとを受け中学校をつくって校長となり、「沼津で素晴らしい新教育をしていたこと」を石田孝造から聞かされ、初めて知ったという。また、「その進歩的な学風」が「大正時代まで沼津の町にただよっていて」、次郎たちの「理想主義」の土壌になったとか、「江原さんがキリスト教でなかったら、江原さんの志した新教育や授産事業は、沼津にもっと根を張ったろうに」などと、石田から聞かされたとする。田部の話を聞いた次郎も、中学生時代に世話になった八矢が「江原さんの最後の生徒」だったと述べ、実父常造も「江原素六の中学校に入学したくて、祖父から、網元の長男は学問はいらない」と言われ、進学できなかったこと、もし進学していたら天理教ではなくキリスト教に入信していたかもしれないと考えた（第八巻「嵐のまえ」）。

右に紹介した中には、細かな点で矛盾や誤りが見受けられる。

八矢が「沼津兵学校」の生徒だったとしているが、我入道村に住む平民だった彼が静岡藩校たる兵学校に入学したはずはなく（平民に開放されていた兵学校附属小学校であれば可能性は皆無ではないが）、江原の「最後の生徒」だったという点からも、「沼津中学校」が正しいはずである。なお、「海に鳴る碑」を『人間の運命』の冒頭に組み込んだ『完全版　人間の運命１　親と子』（二〇一三年、勉誠出版）では、八矢が学んだのは沼津の「海軍学校」だったと訂正されているが、これは、明治二年（一八六九）に明治政府の海軍兵学寮（海軍学校）が刊行した『蒸気器械書』を沼津兵学校の出版書であると誤解した後世の文献（一九三四年の復刻版など）が影響したものだと考えられる。誤った文献を参考にした結果、さらなる誤りを生んでしまったのであろう。

主人公次郎の実父森常造が学びたかったという学校も、最初は「沼津兵学校」と記されているが、後にな

ると「沼津中学校」に変わっている。執筆の過程で、同じ江原素六が関わった学校でも、兵学校と中学校とを混同していたことに気づき、修正したのであろう。「海に鳴る碑」では、兵学校ではなく集成舎中学部となっており、混乱が解消された。

沼津中学校のお雇い教師ミーチャムをイギリス人としている点も間違いで、正しくはカナダ人である。「海に鳴る碑」で、ミーチャムを「ビーチャム」とした理由もわからないし、『人間の運命』との整合性がとれていない。

ただ、些細な事実誤認はともかく、史実と照らし合わせたとき、芹沢の沼津兵学校や江原素六に関する基本認識、すなわち、江原が福沢諭吉のような開化・啓蒙の立場に立ち、主宰した沼津兵学校とその後身沼津中学校がこの地域において進歩的な役割をはたしたとみなす点は、おおむね妥当である。自身の体験や記憶のみならず、何らかの参考文献もあったはずである。『人間の運命』が書かれた時、すでに『江原素六先生伝』（一九二三年）や『沼津市誌』（一九五八〜六一年）などが刊行されており、それらを参照したのかもしれない。

森常造のモデルは、言うまでもなく芹沢の実父芹沢常晴（常蔵、一八七二〜一九四六）である。常晴が親の反対で沼津中学校への進学希望をかなえられなかったことは事実らしい（『私の履歴書　文化人3』、一九八三年、日本経済新聞社）。

石田孝造のモデルは、息子孝一のモデルが市河彦太郎（一八九六〜一九四六、外交官）と植松重雄（一九〇〇〜七五）の二人であるとされるので、それぞれの父、市河彦三（一八七三〜一九三八、沼津町の豪商）と植松幹（一八七〇〜一九三八、原町の地主）の両方が想定されるが、小説の筋立てからすれば後者の比重が高いと言えよう。市河彦三は明治一七年（一八八四）から慶応義塾に学んだが（『慶応義塾入社帳』第三巻・第五巻）、それ以前は江原が校長をつとめる沼津中学校に学んだらしい（大野虎雄『沼津兵学校附属小学校』）。植松幹が沼津中学校に学んだ事実は知られないが、幹の弟多盛（明治三五年二四歳で没）は明治三一年・三二年頃に東京の江原素六宅に寄留するなど、麻布中学校に入学した形跡があり、植松家には江原との関係があった（植松家文書）。

市河彦三
『沼津華鑑』所載

植松多盛・好兄弟
植松嘉代子氏提供
二人とも麻布中学校に
学んだらしい

八矢については、清水次郎長（本名山本長五郎）の遺児と噂されたという「Yさん」なる人物がモデルのようだ（『私の履歴書　文化人3』）。八矢は、「海に鳴る碑」では、森家の居候部屋に住んだ「山本青年」として登場し、やはり「清水の次郎長親分のかくし児」だったと噂された人とされており、やがて清水に帰郷した後渡米する。

また、父常晴の一歳下の従弟で郡会議員をつとめた某（屋号「浜の家」）は、「沼津中学生」「江原さんの学校に学んだ人」であり、光治良少年の理解者だったので、学費の補助を申し出たという（『私の履歴書　文化人3』）。某とは、我入道で肥料製造業を営み（『駿遠豆鑑』）、明治三四年・三五年時点で村会議員をつとめ（『楊原村沿革誌』）、三六年（一九〇三）時点では楊原村選出の郡会議員になっていた芹沢国蔵のことであろう（『静岡県駿東郡誌』）。「海に鳴る碑」では森義次郎という名で登場し、集成舎中学部（正しくは集成舎変則科、後の沼津中学校）に学んだ後、廃校により韮山の中等学校に転校したことになっている。国蔵に、キリスト教に入信し渡米した森忠一郎に相当する兄が実在したのか否かは不明である。

『幕末西洋文化と沼津兵学校』（一九三四年）の著者であり、三井財閥の重鎮だった米山梅吉については沼津中学校出身者として実名が挙げられている。

麻布中学校の「清水教頭」は、江原を補佐した教頭（江原没後は二代校長）清水由松のことであり、フルネームではないものの実名での登場である。江原同様の人格者だった。田部直道のモデルとなった佐賀出身の実業家石丸助三郎（一八六六〜一九三七）の養子（作中では田部平助、実在の嗣子の名は石丸和雄）が、実際に麻布中学校の生徒だったのか否かは、確認できていない。

「海に鳴る碑」には、『人間の運命』にはまったく記されていないこととして、主人公次郎が小学校に入る前の四・五歳の頃、隣家の年上の少年に同行して、我入道の島上寺で塾を開いていた「江間先生」という、元沼津中学校の漢学教師で、「徳川の御家来」「駿府に流れついた武士」だった学者のもとへ通い、読み書きを学んだことが記される。江間は、次郎の優秀さに気づき、次郎の祖父に東京での修学を勧めたりした。次郎も江間に対し、「父のにおい」を感じ、慕った。結局、江間は大学に勤務すべく上京してしまう。ただし、実在の沼津中学校の漢学担当教師（名和謙次・篠木如塊・中島静）には該当する人物はなく、江間は芹沢が造形した架空の人物なのであろう。また、『人間の運命』の続編として書かれた「遠ざかった明日」（一九七二年）では、「江間」という名を使わず、この塾主のことを沼津兵学校の元教師で、寺の和尚の妹婿だったとしており、作品間で統一がとれていない。

（樋口雄彦）

令和４年度新収資料の紹介

昨年度、明治史料館に仲間入りした資料です。

寄贈	望月雅文様 大金津義様 秋山博志様 平野　綏様 山本龍太様	江原素六書額「自彊不息」 市制50周年記念切手シート 馬淵正文・伊熊醇一写真 旧幕臣平野家資料 加藤定吉関係アルバム
購入	**沼津兵学校関係** 「帝国軍人後援会　会況要覧」(江原素六・矢吹秀一・島田三郎など)、松井甲太郎書『小学孝鏡』巻之二・巻之三、久須美祐利発行『簡辞篇』、塚本明毅閲・真野肇・岡敬孝著『筆算訓蒙解』第一篇・第二篇、山田昌邦訳序『幾何学』、林洞海解説徳川家康書「寿」、『東京獣医新報』(深谷周三肖像掲載)、島田三郎書扇面、絵葉書「島田三郎」、絵葉書「衆議院ニ於ル島田三郎氏普選案大演説(二月十四日)、「連合国傷病兵罹災者慰問会趣意書規約」(島田三郎・徳川家達・渋沢栄一の名)、中村六三郎訳・赤松則良閲『代数学用法』巻一、塚原渋柿園詠歌短冊、原田信民発行『大義名分征清譚林』上巻、栗山勝三・村田惇・加藤泰久訳『養馬新論』、佐久間正出版『越前地誌略』、和田正幾筆記『東京演説』、渡瀬寅次郎・石橋絢彦校閲『欧米築路法』、絵葉書「故服部綾雄氏滞米中紐育に於て撮影せる最近の肖像」、西川鐵次郎校閲『大審院判決摘要類纂』 **旧幕臣関係** 石川正身著『郵便はがきひとふで』、小林健次校正『巡査職務心得　全』、旧幕臣上田畯（友助・東作）の辞令・履歴書など **その他沼津の歴史関係** 「松平周防守源公碑銘」、「駿東郡沼津城」(絵図)、「駿州駿東郡沼津」(徳倉山石丁場絵図)、水野忠良書軸、沼津藩士手島右源太書簡、「駿州沼津町商店寿娯録」、「革新改良芽條育蚕法標準表」、「御大礼記念静岡県東部海陸物産共進会趣意書並規則」、小山田正直(沼津市長)『沼津を語る』、沼津海軍工廠工員養成所『夜鶴の声』、「沼津合同新聞」、絵葉書「沼津上香貫渡邉邸」、絵葉書「記念撮影　沼津市第五国民学校五年生　高島幸雄」	

令和４年度当館収蔵資料の利用

明治史料館の資料がいろいろなところで活躍しました。

☆展示使用

４月～６月	三島市郷土資料館　企画展「三嶋暦―武士の世の暦―」『日本地誌提要』『三正綜覧』
５月～８月	西尾市岩瀬文庫　特別展「三河大浜騒動150年～近代化の光と影～」　大浜陣屋絵図(旧沼津藩士杉浦家資料)、写真「服部純」
11月	沼津市「香貫用水世界かんがい施設遺産登録記念パネル展」「沼津市全図」(本町間宮家文書)、「(最新版)沼津市全図」
１月	静岡市歴史博物館　基本展示「静岡藩と新生静岡」「沼津兵学校掟書」、「(静岡学問所教授陣)」
３月	沼津香陵ライオンズクラブ「沼津市制100周年記念事業　地域文化事業「沼津のまちづくり　過去から未来へ」講演　「沼津中心地商店会会社案内図」(拡大パネル)

☆刊行物掲載

４月	武藤秀太郎『島田三郎―判決は国民の輿論に在り―』株式会社ミネルヴァ書房　「映画「沼津兵学校」のポスター」、写真「鈴木知言」、沼津旧友会開催の招待状(沼津兵学校関係者宛葉書)、早稲田擬国会の第五期議案(石川森家文書) 「沼津茶新茶まつり」(チラシ)富士伊豆農業協同組合　写真「江原素六」(江原素六関係史料) 『東京都新宿区　市谷柳町遺跡Ⅳ』東京都建設局・株式会社四門　久須美祐明肖像画(久須美祐利関係資料)
５月	沼津の歴史と文化を耕す会「沼津垣」説明板　「五十三次　沼津」(人物東海道) 「沼津茶そろく」パッケージ　富士伊豆農業協同組合　写真「江原素六」(江原素六関係史料)
６月	「PAO vol.46」株式会社メディウム　「東海道五十三次　沼津　黄昏図」、「同原　朝之富士」
８月	『絵物語ぬまづ昔ばなし第１巻「天狗のすもう」』e-monogatari　写真「市政施行時の沼津市役所」「２代目庁舎」「永代橋ヲ隔テゝ沼津市街ヲ望ム」「黒瀬橋と狩野川」など 『広報ぬまづ　８月15日号』沼津市　「蛇松の図」(本町間宮家文書)
11月	『絵物語ぬまづ昔ばなし第２巻「いちょう観音」』e-monogatari　写真「浮島地区の田植え」「ぬたばの松」(個人蔵)
２月	『絵物語ぬまづ昔ばなし第３巻「千本松原」』e-monogatari　写真「千本浜にあった水族館」「千本公園」
３月	原駅前広場案内板　沼津市　写真「東海道原宿」 『熊谷市史調査報告書　荻野吟子―その歩みと出会い―』熊谷市　写真「荒川重平」 大久保由里『「大東亜共栄圏」における南方国策移民―「南方雄飛」のゆくえ―』株式会社晃洋書房　写真「小磯大将を迎えて」「拓南錬成所全景」(個人蔵) 「見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち」名古屋大学減災連携研究センター　「小林村変地之図」「田地変ジテ湖水トナル」(『地震之記』)
３月～５月	山梨県立博物館企画展「印章　刻まれてきた歴史と文化」「北条家朱印状」２通(獅子浜植松家文書(市指定文化財))

☆テレビ・WEBサイト等

４月	静岡朝日テレビ「とびっきり！しずおか」　写真「我入道の渡し」
10月～	株式会社静岡新聞ニュースサイト「あなたの静岡新聞」生誕180年／没後100年江原素六翁の功績おさらい　写真「江原素六」
11月	静岡朝日テレビ「とびっきり！しずおか」　写真「我入道の渡し」「蛇松線」、「蛇松の図」（本町間宮家文書）

沼津市明治史料館通信
第153号
令和５年５月31日
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂372-1
TEL 055-923-3335
FAX 055-925-3018
印刷　みどり美術印刷株式会社

お　し　ら　せ

今年は沼津市制100周年の記念の年です。大正時代、沼津町とその周辺では、繊維関係の大規模な工場ができるなど都市化が進んだことを背景に、沼津町と楊原村との合併の気運が盛り上がり、大正12年（1923）７月１日両町村が合併し沼津市が誕生しました。沼津市の誕生は静岡市・浜松市に次いで県下で３番目、全国では89番目の市制施行でした。当時の人口は34, 482人、世帯数は5, 596で、市役所も現在の御幸町ではなく大手町にありました。

当館では、７月１日(土)から、市制100周年記念特別展「写真にみる沼津のあゆみ」を開催します。ご来館をお待ちしています。

人事異動

３月31日付で事務補助員大岩史織が退職、４月１日付で事務補助員鈴木和香が着任しました。今後ともよろしくお願いいたします。